



華やかな兵器

小松左京
文藝春秋

(2/15刊・¥980)

七短編を収録する、小松左京の最新短編集である。

過去を取材する、テレビ番組が巻き起こした時間の歪み「とりなおし」。異星人が、地球に仕掛けた秘密兵器「華やかな兵器」。このあたり、昔からの著者の味を出す、アイデアストーリーだろう。(科学を中心とする)洒落たオチネタは、戦後のSFの原点である。けれども、それを使う作家は、今では減っている。あれだけ巧みなシエクリイでさえ、アイデアのバターンが古いと排斥されるのだから、確かに書きにくい。作家の興味の対象も、別にあるようだ。しかし、書けないわけではない。単に「最先端の科学」に限ってみても、アイデアは無数にある。要は、アイデアを生かす書き方なのだ。例えば、本書の作品のようにである。

「歩み去る」は、何かを求めて彷徨する、年を取らない若者たちの話。「曇り空の下で」は、幻の歴史旅行を描く。これらの叙情性は、先に述べたアイデアと絡み合い、著者の短編の底流を成している。もっとも、中間小説誌に発表された作品がほとんどで、やはり著者の特徴であるハードさは希薄だが。

(俊)